戦前期経済小説の存在について

―― 形式的定義による考察 ――

畔　上　秀　人*

Abstract

This study illustrates some novels published before the World War II can be classified as "economic writings" or "economic novels", instead of the common understanding that the genre of literature was established in the post-war period. After first noticing "Jinsei Tokkyu" (Life Express, 1932) was written as an economic writing by Toyohiko Kuno, we found a novel with the subtitle, "economic writing" published in the middle of the Meiji era. Moreover, Itagaki (1932) and Yanagida (1936) have already discussed the economic novels written in the Showa and Meiji eras respectively. Although the recognition of the economic writings is different among scholars, in this paper we define a novel classified in the genre if it was called an economic writing by its author or others in the pre-war period. Under this formal definition, the seven novels were recognized as the economic writings. Two of them were allegories with the aim of enhancing the economic literacy of the public. We conclude some authors published them in order to promulgate existing problems in the real economy and to give a warning to the society. This is the common aim of creating an economic writing between authors in the present day and in the pre-war period.

1. はじめに

本稿は，筆者が参加する文学と経済学に跨る学際的研究「1930年代日本の経済と地方･農村･満州の文学における表象に関する研究」の成果の一部である。1930年代に発表された文学作品の中には，1929年の金融恐慌，及び1930年の昭和恐慌から影響を受けたものが見られる。金融恐慌は「失言恐慌」とも呼ばれるように，その始まりから劇場的であり，一部の銀行家の度を越した非倫理的経営の実態がゴシップとしても盛んに報じられ，国民の注目を浴びた（高橋･森（1968），佐高（1987），小川（1996）等）。続く昭和恐慌は，中村（2004）が記すように，その不況の甚大さだけでなく，ラジオやレコードといった新しいメディアを活用した金解禁に向けてのプロパガンダが背景にあることから，国民の政治経済に対する意識を高めることになった。

しかし，文学界では企業行動や個人の経済活動を題材とすることは，長い間主流ではなかった。そのため，高度経済成長期に突入して国民の多くが企業を中心とする経済システムの中に

＊　東洋学園大学現代経営学部教授。本研究は，JSPS科研費26370228の助成を受けている。また，本稿の草稿は生活経済学会東北部会第22回研究大会（2016年11月19日，於：東北福祉大学ステーションキャンパス）において発表し，討論者の鴨池治東北福祉大学教授を始め，参加者からいただいた貴重な助言によって精度が高められた。さらに，匿名の査読者からは多数の助言をいただいた。ここに記して謝意を表する。

取り込まれるに至り，ようやくその姿を描写する小説が「経済小説」として認知されるようになった。従って，経済小説と呼び得る著作は1950年代終盤から誕生し，小説の一領域として認知されるのは一般に1970年代終盤と見られている（堺（2001，2010），佐高（1983，2004））。

これに対して，昭和初期の恐慌が社会に与えた影響の大きさを顧慮すれば，それを題材にした文学作品が生まれるのは自然な成り行きと考えられ，実際に時事新報にて久野［1932］が発表された。著者久野豊彦は書籍版の「序にかえて」の中で，「この時局経済小説は，時代の要求によって，日本で初めて試みられたもの」と書いている。我々は当初，これを日本で初めての「経済小説」という意味で捉えていた。というのも，『社会文学事典』刊行会（2006）には，日本で最初の経済小説は横光［1938］であり，「経済小説という範疇が作られ，一つの小説ジャンルとして認められるようになったのは，評論家の佐高信の評論活動によってである」と書かれていたからである[1)]。

しかし，その後の調査で，久野［1932］と横光［1938］の間，またそれ以前にも経済小説を自称した著作，若しくは他者からそう称された著作があることがわかった。そこで本稿では，これまでに文学分野でも，また経済史を含む経済学分野でも認識されていなかったと思われる，明治期から戦前期までに著された経済小説の存在を明らかにし，その内容的性質の整理を試みる。次節では本稿における経済小説の定義を明示し，第3節でそれに該当する小説を紹介する。続く第4節では現在の経済小説が持つ要素を，第3節で取り上げた著作に対しても吟味し，現代と戦前期とを比較する。最後の第5節は本稿のまとめである。

2. 経済小説の定義

初めに，本稿における「経済小説」の定義を記す。

- 1945年までに著者自ら「経済小説」と称したか，他者からそう称された小説を経済小説と定義する。

このような形式的定義が成立する一つの前提は，戦前期には経済小説という言葉自体があまり使用されていなかったことである。すなわち，著者や第三者の主観という緩い条件であってもとしても，その数が極めて少ないため，内容の検証は容易に行える[2)]。

そして，第二の前提は，文学，経済学分野で戦前期の経済小説に対する研究はほとんど未着手だということである。仮にある程度の調査や整理，検証が行われていれば，既存の研究成果に基づいた接近をするべきで，こうした形式的定義は無用である。とはいえ，戦前の著作についても経済小説と認める論者は存在するため，以下では1980年代以降に展開された経済小説に対する議論について言及する。

文学分野では，前節で取り上げた『社会文学事典』刊行会（2006）が，佐高（1983，2004）等を参考として経済小説の概念を説明している。そこでは，「経済」という分類の中に，「経

1） 横光利一による『家族会議』は，1935年に東京日日新聞及び大阪毎日新聞で連載され，1938年に創元社から単行本として出版された。本稿では新聞，雑誌に掲載された後に書籍として出版された小説等は，原則として書籍の出版年を記し，初出年は表3で確認できるようにした。また，学術的文献と小説に代表される非学術的資料の両方に言及するため，前者は著者名に続いて丸括弧，後者は同じくカギ括弧内に出版年を記して区別し，参考文献リストも分けた。

2） 当然，現時点で戦前期の著作に対して新たに経済小説という呼称を用いれば，その数は際限がなくなってしまうため，他者から称されたものに関しては1945年までという条件を付けている。

済小説」と並列的に「企業小説」,「商人文学」,「サラリーマン小説」という小分類が設けられているため，他に比べると該当する著作は若干限定的である。

この資料で重要な点は，大正～昭和期特有の問題であるプロレタリア文学との境界について述べられていることである。すなわち，内容的には経済小説に近いプロレタリア文学作品が存在することを認めつつも，両者は異なるとされる。それは，プロレタリア文学者の多くは「支配構造に対する階級闘争の方に目を奪われがちであって，経済のメカニズムと人間の関わりについて冷静に分析する余裕を持たなかった」ことによる[3)]。

一方，社会の中では佐高（1983）の発表に先立ち，日本経済新聞社が「経済・ビジネス社会に生きる人間を主題にした長編小説の分野で新人を発掘」することを目的に,「第1回日経・経済小説」を1979年に創設した。さらに,『週刊ダイヤモンド』（ダイヤモンド社）では，2004年から2007年にかけて「ダイヤモンド経済小説大賞」，2008年から2012年には「城山三郎経済小説大賞」が企画され，それぞれ4回懸賞作品の募集，表彰があった。後者はその名称にも表れているように,「このジャンルの生みの親」を城山三郎としている[4)]。

周知の通り，城山三郎とは経済学者杉浦英一の筆名であり，経済事象を題材とした多数の小説を生み出した。そして，日本ペンクラブ（2014）においては10編の短編経済小説を選出している。このうち8編は戦後に著されたものだが, 戦前期の著作で葉山［1926］と横光［1931］が含まれている。ただ，横光［1938］以降は，戦時経済体制となって「国策できめられただけの経済」に陥り，そのために「すぐれた経済小説は生まれなかった」と分析している[5)]。すなわち，そこでの認識によれば，昭和10年以前に経済小説といえる著作が存在したものの，第二次世界大戦による空白期があり，本格的に書かれるようになるのは戦後になってからということである。

他に経済学者による解説としては, 堺（2001, 2010）がある。堺（2001）によれば，経済小説とは「いろいろな企業や業界，それに関係する人物や経済事件などを描いた小説の総称」であり，文学における分類としては,「日本の文学にあっては，七十年代後半以降に生まれた比較的新しい分野」である[6)]。文学におけるジャンルの確立が遅かった理由は，文学界では企業や人間の商行為を描くことが世俗的とみなされていたためだと分析する。従って，ジャンルの確立は1970年代後半だとしても，経済小説自体は企業社会が発展した高度成長期に生み出されていて，やはり城山［1959］が先鞭をつけたとしている。

経済小説にかかわる経済学者の存在を鑑みれば，文学分野とともに経済学分野でも学術的な接近が行われていると推測できるが，現在のところ確認できた既存研究は少数にとどまる。その中で杉江（2010）は尾崎［1898］, 横光［1938］を紹介しているが，これらを経済小説とはみなさず，作家としての開祖は城山三郎であるという通説を支持している。ただし，経済小説を明示的に定義するというよりは，城山［1979］，松本［1951］をテキストとして用いる形で，その特徴を帰納的に示している。具体的には，経済事象を題材にすることは自明として,「組織と人間」という視座から描いた, ノンフィクショ

3） 本稿で用いる形式的定義の下では，経済小説に該当するプロレタリア文学作品は存在しなかったため，両者の境界に関する議論は保留する。しかし，今後の調査によっては新たに発見される可能性はあり，その際には内容的定義にまで踏み込んで議論しなければならない。

4）「城山三郎経済小説大賞」募集要項。

5） 日本ペンクラブ（2014），486頁。

6） 堺（2001),「はじめに」vii頁，及び6頁。

ンとフィクションの間に位置するノンフィクションノベルというものである。従って，松本［1951］は「経済事象を題材としている点では経済小説の範疇に入ると思われるが，きわめてフィクションの色彩が濃い」ものと位置付けている。さらに，城山の後継者として梶山季之や清水一行を例示しつつも，彼等の著作は「企業小説」若しくは「産業スパイ小説」という通俗性の強いものであるとの見解を述べている。

最近では，一ノ宮（2016）が大学におけるゼミナールの教材として経済小説を用いた教育実践例を紹介している。そこで教材とされているのは比較的最近の経済小説であるが，清水一行や城山三郎の著作を「経済小説分野の古典」と呼んでいる。このことから，一ノ宮（2016）も経済小説の起源について杉江（2010）と同様な認識であるといえる。

以上のように，経済小説は経済事象を題材にするという点は大前提として，内容的定義は文学者，作家，経済学者の中でもまだ統一されていないようである。ただ，その起源は城山［1959］であり，文学，小説における分野の確立は1970～80年代という認識が主流といえる。一方で，横光［1931，1938］，葉山［1926］等戦前の著作を経済小説に含める見解も一部でみられるが，経済小説という言葉の起源や，それを冠した著作が少なくとも明治中期には出現していたことについて，言及した文献は見られない。

そこで，次節では明治期から戦前期までを対象に，本節冒頭の定義による経済小説の存在を示すこととする。以下ではその準備として，戦後の著作を内容面から整理し，経済小説として内包すべき要素を挙げ，それによって分類を試みた鴨下（2004）に着目する。これは，2004年7月17日から9月4日にかけて，『週刊ダイヤモンド』にて経済小説をテーマとした7回の連載コラムである。著者は既存の経済小説が「情報I」，「情報II」，「告発と警告」，「人間性」，「時代物・歴史経済小説」，「新学説の小説化」という6分野に分類できると考えていて，それぞれに該当する4作ずつを挙げ，架空の全集を作るという想定になっている。

情報Iは「代行返上」や「アカハラ」といったその時点での新しい言葉・概念を指し，情報IIは危機対応手順といった既存の情報に基づいて作られたマニュアルのような指針を指すと理解できる[7]。新しく世の中に登場した言葉をキーワードとして用いる小説を読むことにより，読者は辞典で調べるよりも遥かにその意味をよく理解できるという。一方，経済小説が現実の世界で活用できるほどの情報を持つには，「細部の充実」が大切ということから，ディテールの描写は経済小説の必要条件と考えられる。

次に，告発と警告は，社会の暗部を告発し，人々に警告を与えるというものである。告発する対象になる頻度が高いのは企業の不正だが，事実そのものを文章化することが憚られる場合に小説というフィクションの形式が有効となる。梶山［1962］に始まり，高杉［1997］で「一つのスタンダードが完成した」が，時代とともに告発の対象は，「組織よりは個人に，違法違反よりは倫理と良心の問題にシフトしているように思える」という。

現在はまだ少数だが，今後の経済小説にとって求められるタイプが，多様な「人間性」を描いたものと，「時代物・歴史物」である。登場人物の人間性は純文学やミステリー等，他の小説ジャンルでは当然に備えた要素であり，経済小説にも描かれないわけではないが，「強い人間」に偏る傾向があったとみている。確かに経済小説に登場する企業経営者は，あまり特徴がなければ題材としづらいためか，カリスマと称

7）「代行返上」，「アカハラ」は鴨下（2004）が取り上げた小説のタイトルでもあり，それぞれ，幸田［2004］，杉田［2003］である。また，情報IIに挙げられた著作の一つは高村［1997］で，企業への恐喝に対する危機管理を描いている。

されるような強い人物像を伴っていた。しかし，大企業の経営者と一括りにしてもその性格は多様なはずであるにもかかわらず，他の小説ジャンルのように様々な人間性を描いた著作は少ないとされている。

最後に新学説の小説化とは，将来生ずる経済問題を，作者自身の経済理論に基づいて解説，解決するストーリーの経済小説である。経済理論を未来の予測に用いるという点を特徴とし，既存の著作としては堺屋［2002］などを挙げている。

このように，鴨下（2004）は戦後から60年ほどの間の経済小説を類別し，それぞれの分野の核となる要素を明示した。そこで，これらを戦前期の経済小説の考察に応用するため，集約，選択して以下に示す。

（K1）　事象の細部にまで及ぶ情報
（K2）　告発と警告
（K3）　人間性
（K4）　経済学の新学説

3.　戦前期経済小説

初めに，経済小説という言葉が戦前期に文学者によって使用されていた証拠を二つ挙げる。第一は板垣（1932）で，雑誌『新潮』に掲載された「「経済小説」閑語」と題する寄稿である。タイトルではカギ括弧を付しているものの，本文では特に断りなく経済小説という言葉を用いている。少なくとも板垣自身は，経済小説と呼び得る著作が海外には存在すると認識していた。板垣は，アダム・シャルラー（Adam Scharrer），ステファン・ツワイヒ（Stefan Zweig）を例に挙げ，ドイツではインフレーションを描いた小説があることを示し，ケストネル（Kästner）の『ファビアン』に注目する[8]。そして，エレンブルク（Ehrenburg）の『夢の生産工場』を「絵本式な経済小説」と批評していることから，『ファビアン』をより洗練された経済小説とみなしていることがわかる[9]。板垣は経済小説の定義を明示していないものの，大都会の社会生活の描写を重視し，当時の日本にはそうした著作がまだ存在しないとみている。それは，単に対象とする内容だけで判断しているのではなく，文学作品としての水準を要求していることによる。逆に言えば，日本の作家を具体的に挙げてはいないものの，未熟なレベルでは該当する著作があるということになろう。特に，「社会機構の描写」を標榜して「簡単な左翼的公式主義」に陥った著作への批判は，プロレタリア文学を念頭に置いていると思われる。

続いて柳田（1936）を挙げる。これは明治時代の文学作品や作家，社会との関係性等について，「政治篇」，「文学篇」，「人物篇」，「叢話篇」に大別して論じるもので，叢話篇の中に「経済小説」と題した一節がある。板垣（1932）と同様に厳密な定義づけはせず，「経済の事を題材にした小説」を経済小説としているが，そうした著作が生み出される必然性を次のように説明している。すなわち，「文学は社会の反映」ということが定則のようになっていて，社会が政治に対して抱く強い関心の反映が「政治小説」ならば，「明治二十年頃から日本人の関心が，政治問題に向けられると同時に，経済問題に向けられて来た」ことが疑いない以上，経済小説が存在し得るという論理である。そして，該当するものが約20点手元にあるという[10]。残念ながら具体的な著者や題名は記されていないが，

8）　Kästner［1932］。

9）　Ehrenburg［1931］。

10）　現時点では柳田泉が経済小説に言及した資料は柳田（1936）のみだが，「此等を細かく読んで纏めてみたら，何か面白い結果を見せはしないだろうかと，今から楽しんで居る次第だ」とあるため，今後の調査により発見される可能性はある。

表 1　形式的定義による経済小説

発行年	著者	タイトル	根拠
1888（明 21）	春日舎長閑（後藤薫），草風亭芳之（高橋芳之丞）	黄金之花：経済説話	1888 年 4 月 10 日読売新聞にて，「経済小説」として紹介される
1888（明 21）	前田香雪（前田健次郎，昔廼人成）	金貸気質：経済小説	タイトルにて自称
1909（明 42）	米光関月（米光亀次郎）	差米籠	『実業少年』に「経済小説」として掲載
1920（大 9）	今西夙川（今西林三郎）	愛国美談：経済小説	タイトルにて自称
1926（大 15）	原田道男	フラン暴落の教訓	『作興』に「経済小説」として掲載
1928（昭 3）	山田中	嵐吹く日	『公民講座』に「政治経済小説」として掲載
1932（昭 7）	久野豊彦	人生特急	「序にかえて」の中で「時局経済小説」を自称
1937（昭 12）	久我青村	金　ラルジャン	『経済マガジン』に「経済小説」として掲載

これらが内容的特徴により 5 種類に集約できるとのことで，それらを列挙する。

（Y1）　経済学の理論を通俗化して大衆にのみこませる為に小説にしたもの
（Y2）　当時の経済的関心の根本をなしていた鉄道熱を描いたもの
（Y3）　諸種の会社乃至は労使関係に迄及んで暴露を試みたもの
（Y4）　黄金の力を賛美するもの
（Y5）　黄金の力を呪うもの

これらを見ると，先に挙げた鴨下（2004）に基づく（K1）～（K4）の要素といくつか重なっていることがわかる。最も顕著といえるのは（K2）と（Y3）で，明治期から現在に至るまで，会社組織の不正が絶えることはなく，小説を含めたジャーナリズムが市民レベルでの対抗措置になっていることが示される。また，経済学のかかわり方は異なるが，その理論が小説の要素となる点においては，（K4）と（Y1）に類似性がある。明治期においては欧米から入り込む経済理論それ自体が新しい学説だとみれば，両者は共通している。

以下では現代の経済小説が持つ要素（K1）～（K4），明治文学における経済小説の分類（Y1）～（Y5）を念頭に置き，形式的定義に基づいて経済小説とみなす著作を解説する。それらを年代順に並べたものが表 1 である[11]。

3.1　明治期

「金貸気質」

前田［1888］は 1886 年に「絵入朝野新聞」に連載されたもので（表 3），新聞連載時の副題は「経済小説」ではなく「古今重宝」だった。書籍版であえて副題を変えたのは，柳田（1936）が述べた明治 20 年頃の「経済熱」を反映したものと考えられる。前田は通常の筆名である「前田香雪」ではなく「昔廼人成」と称し，本書は古い時代設定が取られている。しかし，序文には同書が「現今貸借法の不条理多きを風刺し暗に之を責めて矯正を促す」目的であると書かれていて，柳田（1936）の区分では（Y5）が当

11）　表 1 は未完のものや誤植と思われるものも含んでいる。

てはまる。本文でも，金貸しのテクニックや無知な借り手から不当に利益を得る実態，一方で素人が十分な準備なく貸金業を開始して失敗する有様等，金銭の負の側面が描写されているからである。とはいえ，いわゆる小新聞の一つである絵入朝野新聞に連載されたものであるため，読者層は一般大衆で，娯楽性を満たす内容となっている。

通常ならば章にあたるものを回として，それが新聞掲載1回分の7乃至8の話（わ）で成り立っている。各回のタイトルはないが，話（わ）に対しては「大名に注込（そそぎこん）だ黄金水流れの末はふちとなるお懸屋の内幕」（第1回の1）などと長い題がつけられている。実際には4回構成であるが，本来はもう1話，「公私立銀行貸付の実況」を記す予定だったという。ところが，新聞に第4回が掲載されると「大に或る一方を驚動せしめ」たため，「（編者の）忠告により惜しむべき筆を擱（かく）し終に取置の銀行社会ママには及ぼされ」なかったとのことである[12]。従って，当初は鴨下（2004）の（K2）の要素を含み，柳田（1936）の（Y3）に区分される内容をより強調する構想があったと考えられる。

「黄金之花」

同時期の春日舎・草風亭［1888］も文章が第○回というように回数で分かれていて，新聞か雑誌に連載されたものと思われるが，現時点では確認できていない。また，著者の本書前後の著作も確認できていないため，どちらも文学作家ではないと思われる。というのも，草風亭（高橋）は明治法律学校で乗竹孝太郎から経済学を教授されたと序文に書かれていて，経済記者等の可能性が考えられる。表1の通り，この著作の広告は読売新聞に掲載されている。読売新聞も当時は絵入朝野新聞と同様小新聞に分類されるものであるが，通俗性において他紙とは若干異なっている[13]。少なくとも書籍版の本書は文語体で，ルビも振られていないことから，後述のように子女のために創作したと凡例で述べながら，読者は知識レベルの高い層に限定されたのではないかと思われる[14]。

さて，この著作は（Y1）に完全に合致するものである。冒頭には「凡例」があり，ミルの『経済論』とスミスの『富国論』とを骨子として，子女に貨幣（金）ばかりを大事がる観念を忘れさせるため，財貨と貨幣との関係を情話にしたということが述べられている。他に底本としているのは，レヴィの『商業史』，ケリーの『経済学』，マクロードの『経済哲学』である。36頁注には，「石川暎作氏の係る富国論―中略―きわめて絶快なる者なり」とあるため，彼等の紹介する『富国論』は石川暎作と嵯峨正作による翻訳と予想される[15]。

西洋の経済学テキストで，日本で初めて翻訳されたものは神田（1867）とされている（杉原（1990），上久保（2003），寺西（2010））。それから約20年の間に多数の翻訳が著されるとともに，それらが学校でも教授されるようになり，柳田（1936）のいう「経済熱」がこの時期に起こっていた。そのため，経済学の理論を通俗化した小説が現れることは理解できるが，こうした試みは現在でもなかなか難しいように，本書

12） 序文による。また，あとがきには「銀行会社の棚卸しはちと迷惑」と書かれている。

13） 大新聞と小新聞の比較，及び小新聞における読売新聞の独自性については山本（1959）で解説されている。

14） 読者層については，読売新聞以外にも広告が掲載されていたかもしれないため，断定はできない。また，教員など知識レベルの高い読者を介して一般大衆に本書の内容が伝えられることを，著者が期待していた可能性もある。

15） 寺西（2010）12頁図表1-1には，「明治前期までの主要経済学書とその翻訳」が整理されており，『富国論』他，春日舎・草風亭［1888］と同時代に経済学の専門書が集中して翻訳されていることがわかる。

でも成功していない。それは，著者自身が純粋な小説としても，経済学科のテキストとしても「隔履掻痒の憾を免れない」と述べていることからもわかる。そもそも構想における失敗があったことを示すために内容を要約すれば，次のようになる。

イギリスに住む20歳の独身資産家婦人ウェルス（wealth，財貨）嬢にはプロダクション（production, 生産），エクスチェンジ（exchange，交易），ヂストリビューション（distribution，配財）という3人の資産管理者がおり，他にモニー（money，金）という侍女を置いている。ところが，フリー・トレード（free trade，自由貿易制度）氏という人物に誘われてモニーが国外のパリに行ってしまうことをガヴァーメント（government，政府）公が心配し，マーカンタイル・システム（mercantile system，保護貿易制度）氏と協力して阻止しようとする。

このように，一国の富に与える貿易制度の影響を議論する目的としては理解できるが，家計レベルで上記のようなストーリーを当てはめることは難しい。現在の経済学の入門書においても経済主体を擬人化して解説する技法はしばしば用いられるが，本書のように財貨，貨幣，政府に加えて，保護貿易，自由貿易といった制度まで人に例えるのはかなり無理がある。実際，フリー・トレード氏を実力で逐斥するために，凡例では示されていないマーカンタイル・システム氏の部下，「カストム（custom，税関）」を後半で唐突に登場させるものの，次回に続くという形で完結せずに終わっている[16]。

「差米籠」

表1中明治期最後の著作，米光［1909］は産業に従事する未成年者に向けて創刊された雑誌『実業少年』に掲載された5頁完結の短編小説で，タイトルの差米籠とは，サンプルとして俵から抜き出す見本米を入れる籠のことである。貧しい家庭から大きな海船問屋へ奉公に来た少年が，ある日差米籠の整理を命じられ，作業中に出てくる2，3粒の米を放棄せずに自らの意思で拾い集めるというあらすじである。実家を離れて他人とともに労働・生活しなければならない境遇ながら，生活環境はむしろ実家よりも豊かであり，勤勉と忍耐によって幸福が訪れることを予感させる。ただ，そうした中でも実家のような貧しい家庭のあることを忘れず，一粒の米も無駄にするべきでないという少年の姿から，勤倹質朴の教訓が読み取れる。

この少年は具体的な人物ではなく，当時のありふれた「実業少年」の姿と思われるが，作業に時間を要してしまうことで番頭から叱責される可能性も顧みず，「えッ，叱られたら其時の事だ」と米粒を無駄にしない選択をする少年の心理描写は，（K3）の要素を内包するといってもよい。

より時代が下れば細井［1925］, 小林［1929a］のように，勤勉や忍耐だけでは労働者の生存さえも維持できないという主張が現れてくる。これに対して，米光若しくは編集者が本篇のタイトルに経済小説という言葉を冠した背景には，成長・発展が経済厚生の向上をもたらすという期待があったと思われる[17]。

3.2　大正期

大正期以降は労働問題や小作争議，恐慌といった社会・経済的問題が小説の題材として取り上げられるようになる。実現に至らなかったものの，細井和喜蔵は，細井（1925）の自序の中で，「いま私は，工場を小説の形式によって芸術的に表現したものを，世の中へ送り出そう

16）　続編が存在する可能性もあるが，現時点では見つかっていない。

17）　目次を参照すると，恰も経済小説が一つのカテゴリーとして設けられたかのように見えるが，それは当該号のみで，次号以降には再び使われることはなかった。

と意図している」と書いている。すなわち，社会への影響力という面で，小説が政治活動や社会運動といった直接的手段に並び得るものと認識されつつあったといえる。

「愛国美談」

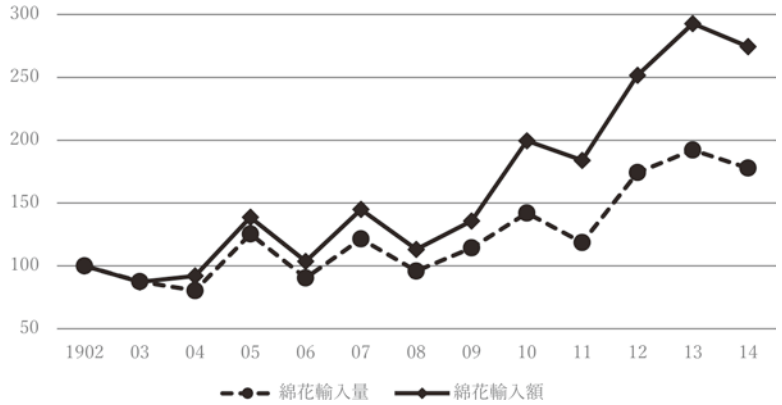
そのような解釈によれば，実業家として成功した後に政治家となった今西林三郎が自身の著作のタイトルに「経済小説」を冠したことも首肯できる。今西は阪神電鉄株式会社の専務を務めるなど，実業家として著名な人物であり，鈴木・小早川（2006）に実業界での位置付けを知ることができる。一方で，今西は阪神電鉄株式会社の宣伝も兼ねる『市外居住のすすめ』，『郊外生活』の創刊・編集にかかわり，自身も寄稿している（竹村（1998），永藤（2007））。これらの雑誌は，人口過密化による衛生上の問題等を抱える都心よりも，生活・教育環境の良い郊外に居住することを推奨するものである。各論としては大阪市内よりも西宮，御影，住吉といった地域への居住を勧めるもので，結果として住宅開発及び阪神電鉄乗客数の拡大につながるものである。一面では企業利益の拡大のために，生活環境問題を利用したと捉えられるが，社会における問題の解決に経済システムを活用した先駆的な例ともいえる。

経済小説を自称する今西［1920］は，地主と小作の間の紛争も経済システムを応用して解決できると主張する。モデルの存在は明らかでないが，しばしば小作争議が発生する三重県の寒村が舞台で，主人公である小作側のリーダー的青年が紛争を抑えつつ絹糸事業を立ち上げ，最終的に紛争が解決されるというあらすじである。小作争議というテーマとしては，プロレタリア小説の小林［1929b］と同じであるが，問題解決の手法と結末は対照的に保守的である。しかし，当時の政治に対しては批判的で，主人公とともに絹糸事業に加わる小学校教師の言葉を用いて，「満足に需用ママ供給の原則も知らない奴が，物価調節をやるのだ，それを又通貨の意味も分らなくって熾んに攻撃するのが現代の世態」と述べる。「奴」とは政治家一般のことで，その経済知識や現状分析能力の欠如を攻撃している。

鉄道や電力といった先進的産業にかかわった今西だが，南豫（四国）製絲の社長や東洋毛絲紡績の取締役を務め，養蚕業の奨励にも努めていた。本著作は「愛国美談」というタイトルからして，農村や繊維産業という範疇にとどまらず，国家的な見地を持って書かれたものである。

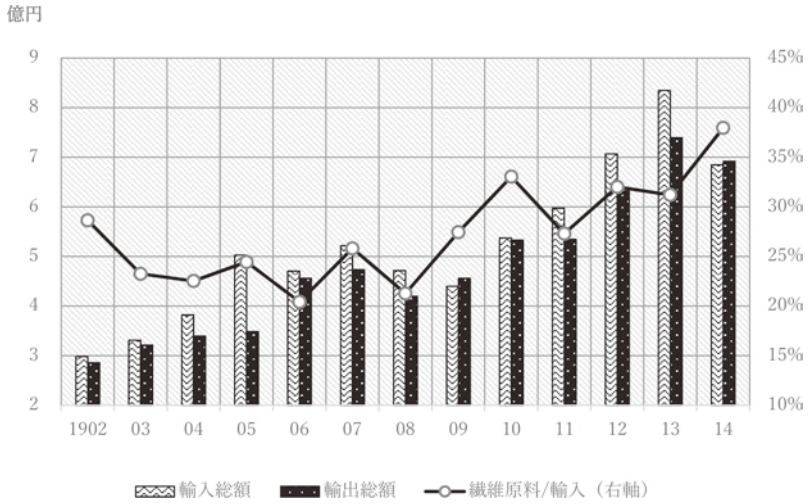
今西（1925）には，明治元年度から大正3年度に日本の貿易収支が黒字になった年度が6か年しかなく，特に原料としての綿花の輸入が多い割には加工品の輸出が振るわないことを危惧する旨が書かれている。綿花輸入については，引用元を明らかにしていないが1902～14年の数値を挙げていて，それをもとに推移を表すと図1のようになる。確かに，1902年に比べて1913年は数量で約2倍，金額で約3倍になっていて，「中流以下に於ける我邦人の常用せる衣服其他の附属品は，殆ど綿製品即ち輸入品にあらずや」との指摘も頷ける。ただ，綿花輸入が貿易収支全体に占める大きさについては示されていないので，山澤・山本（1990）からデータを引用する。それによると，今西（1925）の綿花輸入額は山澤・山本（1990）の繊維原料輸入額を超えることはなく，後者に占める前者の割合は84～93%であるので，信頼できるとともにこの期間の繊維原料は大部分が綿花だったということになる。そこで，図2に1902～14年の日本の輸出入総額と輸入額に占める繊維原料の割合を示す。これと図1を合わせ見ると，輸入全体に占める繊維原料の割合は30%前後を保っているものの，1909年から1913年までの輸入総額の伸長と綿花輸入金額の拡大が重なることがわかる。特に一般大衆の常用品が輸入に依存し，その価格変動が家計に影響する事態を危惧しても不思議ではない。

図 1　綿花輸入量



出所：今西（1925）中巻 48～49 頁掲載データより作成。
注：綿花輸入量，額の単位はそれぞれ斤，円で，1902 年値を 100 とする。数量，金額ともに実綿と繰綿の合計値である。

図 2　繊維原料と貿易



出所：山澤・山本（1990）176～179 頁第 1，2 表。値は当年価格金額。

このことから今西は養蚕業の奨励に注力し，本書もその一環として著されたのである。また，出身地の愛媛県が養蚕に適した地勢であるにもかかわらず，養蚕先進地域である長野県や群馬県に遠く及ばないことを悲観していた。そこで，今西の現状分析の元となったデータから，愛媛県と小説の舞台の三重県について，養蚕業における地位を確認してみたい。

表 2 には，今西（1925）に基づいて，三重県，愛媛県，及び全国の繭生産額，蚕種掃立枚数，桑園面積，春夏収繭額等が示されている。繭生産額，収繭額，繭産額と表記は異なるがほぼ同じものを指していて，繭生産額の単位が石と表記されていることから，他も同様に体積だと思われる。これによると，愛媛県の蚕種掃立枚数当たり，桑園面積当たりの繭生産額は全国でも

表 2　三重県・和歌山県の繭生産

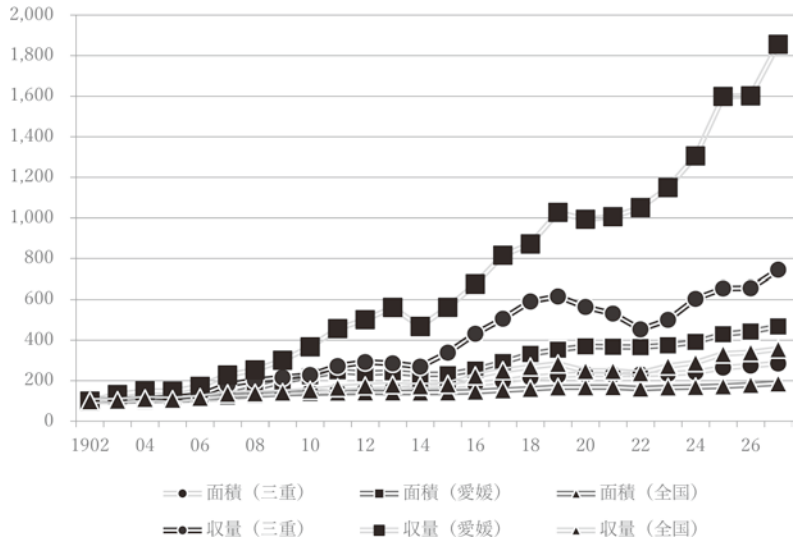
	繭生産額 (a)	蚕種掃立 (b)	桑園面積 (c)	a/b	a/c	収繭額	春繭産額	夏繭産額	春夏合計
年度	1913	1913	1912			1915	1918	1918	1918
三重	133,043	118,997	90,683	1.12	1.47	157,823	122,711	142,775	265,486
	11	13	18	10	6	11	10	6	7
愛媛	86,033	67,358	56,346	1.28	1.53	86,178	68,570	61,362	129,932
	17	21	25	1	5	17	20	15	18
全国	4,591,542	5,150,441	4,536,264	0.89	1.01	4,647,428	3,479,303	3,284,454	6,763,757
単位	石	枚	反	石/枚	石/反	石	石	石	石

出所：今西（1925）中巻 57～58 頁，下巻 11，36 頁掲載データより作成。
注：三重，愛媛の下段の数字は 47 都道府県中の順位を表す。

上位に位置するものの，規模としては三重県の半分程度であることがわかる。すなわち，愛媛県の養蚕業は，生産性は高いが発展途上で，それを考慮すれば三重県は適当な目標といえよう。

より長期間の推移を見るため，繭生産統計調査・長期累年統計表（農林水産省）をもとに，1902～27 年の三重県，愛媛県，及び全国の桑園面積と収繭量の変化を図 3 に表す。この統計の面積単位はヘクタールで，今西（1925）では反になっているが，単位を換算すれば 1912 年時点の値はほぼ同等である。図 3 を見ると，愛媛県の収繭量は 1902 年から 1927 年にかけて約 20 倍に達するほどに成長していることがわかる。そして，桑園面積の伸びは 4 倍程度なので，生産性はさらに上昇している。収繭量の全国順位も 1902 年時点で 29 位だったものが 1927 年には 10 位になり，今西の努力は報われたとい

図 3　桑園面積及び収繭量（1902＝100）



出所：繭生産統計調査・長期累年統計表（農林水産省）をもとに作成。
注：桑園面積，収繭量の単位は，それぞれヘクタール，トンである。

える。一方，三重県も途中後退期があるものの収繭量は拡大し，全国順位は1902年時点の18位から1927年時点の7位にまで上昇している。これを見れば，今西が単なる思いつきで舞台設定をしたのではなく，小説発表後の三重県養蚕業の発展も見据えていたと考えられる。

以上から，大正期の著作である本書は，やはり明治期を対象とした柳田（1936）の区分には当てはまらないようだが，経済システムや経済学に対する信頼という側面に注目すれば（Y1）に該当し，鴨下（2004）の（K4）の要素を含むといえる。そして，小説の主張が実証的根拠を持つという意味で，それ以前の著作にはない先進性が感じられる[18]。

「フラン暴落の教訓」

大正期のもう一つの経済小説は原田［1926］であるが，この副題がついているのは中目次だけで，外目次と本文には「経済小話」と記されている。内容的にも，対英ポンドで価値が低下した仏フランを引き合いに，円貨が対米ドルで低下した場合に予測される状況を述べた論説である。誤植とはいえ，柔道をテーマとした雑誌である『作興』にこうした内容の文章が掲載されることは興味深く，金解禁をめぐり幅広く議論されていたことがわかる。

3.3　昭和期

「嵐吹く日」

山田［1928］は武藤山治が会長を務める実業同志会の雑誌『公民講座』に「政治経済小説」と冠して連載された小説である。これは，Martineau（1832）に収められている“Life in the Wilds”をもとにした翻案小説であるため，「政治経済」という言葉が用いられている。勿論それはpolitical economyを直訳したものであるので，意味するところは経済学である。

山田はまえがきにあたる部分で，「今から百年ほど以前の英国民は恰度現在の吾邦同様の政治並に経済的困難に遭遇してゐた，その時に全国民に政治経済の智識を吹き込むで，大に国民が政治と経済に関する見識を涵養して大綱を奏した作品」としてMartineau（1832）に注目したことを述べている。というのも，「政治経済の学問は，立憲国民にとって殊更必要であるが，この智識を授ける所の政治経済学教科書や其他の研究図書は，―中略―多数の民衆にとっては興味が到って尠ない」ため，「興味ある物語の裡に，自ら政治経済の智識と原理とを能く理解され得る書物」を時代が要求しているとみているからである。原典のMartineau（1832）自体が（Y1）に該当し，経済学のテキストでしばしば引用されるデフォーの『ロビンソン・クルーソー』と内容的に類似している[19]。すなわち，先住民にほとんどの財産を奪われた南アフリカの英国人植民が，自然（資本）と労働力を用いて富を生産し，拡大させていくという筋書きである。

このような寓話も柳田（1936）の認識においては経済小説とみなされると思われるが，現実の人間行動に基づかないことから，戦後の経済小説の議論からは除外されると考えられる。

「人生特急」

久野［1932］は，金融恐慌によって破綻した

18）　本書の発行所は「東京堂書店」と記されており，現在の株式会社東京堂である。価格は1円80銭とやや高いが，大手出版社を通じているため，一般の書店には出荷されていたと思われる。ただ，今西（1925）によれば，今西自身が本書を「各方面に配布」したということである。

19）　例えば，Mankiw（2004）の364～365頁には，生産性の概念を説明するために『ロビンソン・クルーソー』を紹介している。また，『オズの魔法使い』も経済学に関連する寓話としてしばしば用いられる（Rockoff（1990），Hansen（2002）他）。

あかぢ貯蓄銀行をモデルに，時事新報に連載された小説である。山﨑（2006）によれば，久野豊彦は1896年に生まれ，慶応大学経済学部を卒業した後，1923年頃から1933年頃までの間創作活動を行った。創作活動期間中に経済学者ダグラスへの関心を示し，後に名古屋商科大学教授となっていて，作家から経済学者に転身した人物である。

書籍版の「序にかえて」には，「この時局経済小説は，時代の要求によって，日本で初めて試みられたもの」と書かれている。先述の通り我々は当初これを日本で初めて書かれた経済小説という意味に理解していたが，それ以前に経済小説を自称した作品が複数存在していることがわかった。そこで，著者は経済小説を冠した著作が過去に存在していることを承知しており，それを応用して「時局」とつけたものと思われる。よって初めての試みとは，「現代の社会経済生活に於いて，最も横暴を極むる銀行金融業者を拉しきたり，―中略―現代の金融組織の欠陥をさらけだし」たことだと理解できる。

あらすじは，あかぢ貯蓄銀行をモデルとした「あかぢ銀行」の頭取伊駒虎三が横領を続けた末に銀行を破綻させ，一切責任を負わないばかりか，大金を手にするというものである。当然これは実際のあかぢ貯蓄銀行の末路とは異なり，実質的な経営者だった専務の渡辺六郎は逮捕されている（佐高（1987））。

主題といえる「金融組織の欠陥」を最も端的に表した部分は，横領罪で収監された生駒頭取の部下の述懐である[20]。すなわち，「悪人が銀行へはひつてゆくのではなくつて銀行から悪人が，自然に出てくるやうに仕組まれてゐさうにさへ思はれる」とある。そして，「銀行の組織が，もつと社会的に統制されてゐたら，銀行から悪人もでなかつたろうし，そんな種類の罪悪も生まれなかつたにちがひないのだ」と，銀行に対する監督規制の必要性が指摘されている。現代的で影響も大きな経済事件を題材にしていることから，（K2）の要素を含み（Y3）に該当する著作である。

「ラルジャン」

久我［1937］は，フランスの著名作家エミール・ゾラによる“L’ Argent”の翻案小説で，『経済マガジン』第1巻第1号から連載された[21]。しかし，この号から第3号までの目次は単に「小説」という区分で，第4号になって初めて「経済小説」となる。それ以降どのようになるか興味深いところだが，著者の久我青村が出征のため休載される旨が，第5号の編集後記に記されている。

4. 内容的定義に向けての考察

前節に挙げた原田［1926］を除く7編を基に，現代と戦前期の経済小説を比較すると，両者の間の相違点と共通点を挙げることができる。

初めに相違点としては，経済学を平易に解説した寓話的小説の扱いである。春日舎・草風亭［1888］は新聞広告で経済小説と称され，山田［1928］は政治経済小説を自称した。また，柳田（1936）も「経済学の理論を通俗化して大衆にのみこませる為に小説にしたもの」（Y1）を経済小説と捉えている。一方，現在では鴨下（2004）が「経済学の新学説を用いたもの」を一つの要素としているものの，創作とはいえ現実性がかなり重視されている。また，佐高（1983, 2003）や堺（2001, 2010）でも，そうした著作は挙げられていない。現代においては経済学教科書及び解説書は夥しい数に上るため，それで一つの出版分野が形成されている。小説の形式を取ったものがあるとしても，それを経済小説

20） 319頁。

21） “L’ Argent”は，この約20年前に飯田旗軒の邦訳がある（飯田［1916］）。

に区分しないという見解には賛成できる。

とはいえ，明治初頭には牧山耕平が自身の訳した『初学経済論』の入門書である牧山（1880）を発表していて，当時から経済学を平易に解説する書籍は少なくなかった。実際，『大日本帝国内務省第一回統計報告』（内務大臣官房文書課）の「図書及新聞紙」にも，既に出版分野として経済が政事，法律と並び独立して設けられていて，1884 年には 16 部の著述，3 部の翻訳があったことがわかる[22]。同統計によれば，その後も経済関連図書は出版数を伸ばしていき，特に雑誌が多種類に上ることを見れば，国民の関心の高さが窺える。

こうした背景から，春日舎・草風亭［1888］，山田［1928］のような寓話の創作や翻案が試みられていたのではないかと推測され，もしそれらが現実性と先進性を備えていれば，現代にも通じる経済小説として認められるだろう。

次に共通点としては，前節でも触れた通り，（K2）と（Y3）に相通ずる暴露と警告で，特に銀行経営がその対象とされることである。前田［1888］は当時の銀行会社一般を批判し，久野［1932］はあかぢ貯蓄銀行をターゲットとした。そして，戦後の経済小説を区分して解説した佐高（1983）も，銀行に関連する著作を一番目に挙げている。

日本における近代的銀行システムが安定的に機能するのは明治中盤以降であるが，幕末には手形を活用した両替商によって実質的な銀行機能はかなり発展していた。玉置（1994）は,「幕末両替商は，当時のもっとも先進的なイギリスなどの銀行と変わるところがなかった」と記している。1870 年代終わりには銀行の起業が流行し, 1882 年に日本銀行が設立されると（表 3），小説の中で銀行は犯罪の場として頻繁に描かれるようになる。これは欧米の探偵小説がそうした設定になっていたためで，それらを底本とした黒岩［1889a, b, c］，不知火［1893］等が明治中期に発表された。特に黒岩の著作には,「銀行奇談」や「銀行奇聞」といった副題がつけられている。その他，欧米の小説にヒントを得ている可能性はあるものの，人名・地名ともに日本の設定になっている三宅［1893］，吉田［1901］，江見・谷［1906］，探偵研究会［1915］等, 多くの著作がある。これらは探偵小説だが, 事務員の作業や証券の管理等，銀行内の様子を描いた通俗小説が日本の読者に受け入れられていたことを証明するものである。

銀行経営に対する批判と細部実写という意味で久野［1932］に近い著作は，金融恐慌の影響を受けた伊藤［1930］が第一に挙げられる。あらすじは，東京渡辺銀行及び三井銀行をモデルとした銀行にそれぞれ勤務する兄と弟が，関東大震災後の経済混乱と金融恐慌に翻弄され，最後に兄が自殺するというものである。プロレタリア文学の雑誌である『文芸戦線』に掲載されているように，恐慌を契機として市場が競争的な状態から独占に向かっていくというマルクス主義的史観に基づいている。この点,『社会文学事典』刊行会（2006）や板垣（1932）の認識からすればプロレタリア文学であって経済小説ではないということになるが，細部実写についてはかなり入念である。すなわち，登場する人物や銀行，その他企業はモデルを特定でき，資本金額や出資関係がほぼ事実通りに書かれている[23]。

その他，遠藤［1922］は高知商業銀行の破綻による個人預金者の被害を伝えることから始まり, 独自の銀行論を展開している。長木［1929］は, 著者が情報通の「或る名士」にインタビューする形式で,「ボロ銀行の双対」である内国貯蓄[ママ]銀行と日の出貯蓄銀行の非倫理的経営を

22） 同じく 1884 年の政事，法律の著述数は，それぞれ 63 部，167 部で，翻訳数はどちらも 35 部だった。

23） 細部実写の検証には紙幅を要するため，伊藤［1930］についての考察は稿を改めて記すことにする。

表 3　関連年表（1867～1935 年）

年	著作	イベント	景気
1867	『経済小学』		恐慌
1872		国立銀行条例公布	
1879		銀行企ママ業熱旺盛	好況
1880	『経済論読本』		好況
1881		明治生命設立	好況
1882		日本銀行開業	不況
1886	「金貸気質」（絵入朝野新聞）		好況
1888	『黄金之花』		好況
1889	「大盗賊」，「他人の銭」，「魔術の賊」（今日新聞）		好況
1890		銀行条例公布	恐慌
1893	『十萬株』，「火中の美人」		回復期
1895		日清戦争	回復挫折
1897	「金色夜叉」（読売新聞）		好況→恐慌
1898			不況
1900		北清事変	回復挫折
1901	『銀行頭取謀殺事件』		不況
1905		日露戦争	
1906	『稲妻銀行』		好況
1909	「差米籠」（実業少年）		沈衰期
1914		第一次世界大戦	恐慌
1915	『白き腕』		不況
1916	『金』		好況
1920	『愛国美談』	銀行休業	恐慌
1922	「吾輩の最新銀行論」（大阪朝日新聞） 『銀行罪悪史』	高知商業，日本商工，積善銀行破綻	慢性的不景気
1923		関東大震災	慢性的不景気
1925	『女工哀史』		慢性的不景気
1926	「セメント樽の中の手紙」（文芸戦線） 「フラン暴落の教訓」（作興）		不況激化
1927		銀行法公布	金融恐慌
1929	『裏面を語る：財界打明け話』 「蟹工船」（戦旗） 「不在地主」（中央公論，戦旗） 「恐慌」（文芸戦線）		不況激化（昭和恐慌）
1930	「機械」（改造）	金解禁	不況激化
1932	「人生特急」（時事新報）		回復時代
1935	「家族会議」（東京日日新聞，大阪毎日新聞）		回復時代

注：書籍版より先に新聞・雑誌に掲載されたものは，その年に記載しているため，本文中の出版年と異なる。「イベント」，「景気」は『経済マガジン』第 1 巻第 1 号の「明治維新以来の景気年表」を基に作成した。

実名で批判するものである[24]。そこには，日の出貯蓄銀行が資本不足に陥った際，査定の難しい山林を購入し，帳簿上はその数倍の評価額で計上したといったことが書かれている。佐高（1983），鴨下（2004）の観点では，企業や個人の行為について違法性が疑われるものの，それを証明できない場合の情報伝達手段こそが経済小説である。その意味では，長木［1929］や遠藤［1922］は実名を挙げているので経済小説とはみなせないかもしれないが，事実に基づいた細部実写があり，暴露と警告を目的としている点で，それに近い著作といえる[25]。

5. ま と め

本稿では，形式的定義による戦前期の経済小説の存在を明らかにした。この定義においては該当する著作の数は限定されるが，その内容を考察すると，現在の経済小説が具備すべきと認識されている要素を持つものが見られた。特に，現実経済の中で生じている問題を暴露し，世間に警告を与えるという使命は普遍的であるといえる。そして，それが小説という創作物である利点は，報道であれば厳密な裏付けが必要な事項をも伝達できることである。こうした小説のジャーナリズム的性格は，政治風刺等の形でより古くから見られるが，銀行破綻によって少額預金者が損害を被る事態が顕在化してくると，より忠実な細部実写を伴う著作が現れる。その傾向は，個別の銀行経営者の非倫理的行動を批判する意図により促進されたと考えられる。

一方，経済学を平易に解説する目的で創作された寓話的小説は，現在の経済小説に関する議論の中では，それとみなさない考え方が主流である。しかし，明治時代には欧米の経済学は新しい学問であり，先端的理論を伝達するという意味では現在の経済小説の認識とも重なっている。とはいえ，現時点では明治中期以降に発表された著作を発見できていないため，今後調査を継続する。

その他，今後の研究課題としては，柳田（1936）が挙げた「当時の経済的関心の根本をなしていた鉄道熱を描いたもの」（Y2）に該当する著作の検証がある。また，明治中期から発表された多岐にわたる経済学テキストから寓話的解説書までを整理することにより，現在では直接的計測の不可能な，当時の日本人の経済リテラシー水準や経済倫理観を推定できるかもしれない。これまでに活用されていなかった資料により，新事実の発見を目指したい。

24） 日の出貯蓄銀行が実名で表記されており，「京橋」という住所も一致することから，「内国貯蓄銀行」と書かれているのは内国貯金銀行であると考えて間違いない。

25） 1928 年末現在の集計である『第 35 回銀行総覧』（大蔵省銀行局）では，日の出貯蓄銀行は業務停止となっている。1930 年 9 月 17，1934 年 6 月 17, 1935 年 3 月 14 日読売新聞によれば，代議士の竹下文隆取締役専務が背任罪で起訴され，800 円の罰金刑が科されたとある。対照的に，内国貯金銀行は 1928 年末に 4 支店だったものが 1940 年末には 13 支店に拡大し，預金額も順調に伸びたようである。

【参考文献・学術】

Hansen, Bradley A.　2002　“The Fable of the Allegory : The Wizard of OZ in Economics,” Journal of Economic Education, 33(3), pp. 254-264

Mankiw, N.G.　2004　“Essentials of Economics,” the third edition, Thomson

Martineau, Harriet　1832　“Illustrations of Political Economy in 9 volumes,” Charles Fox, London

Rockoff, Hugh　1990　“The “Wizard of Oz” as a Monetary Allegory,” Journal of Political Economy, 98(4), pp. 739-760

板垣鷹穂　1932　「経済小説」閑語，『新潮』昭和 7 年第 10 号，pp. 35-38

一ノ宮士郎　2016　アクティブラーニングに関する一考察――一ノ宮ゼミナールにおける実践―，『専修経営学論集』第 101 号，pp. 1-23

今西林三郎　1925 『今西林三郎遺文録』，小松光雄編，今西与三郎
永藤清子　2007 阪神電気鉄道の発達と阪神地域における郊外生活の形成，『甲子園短期大学紀要』第 26 号，pp. 13-20
小川功　1996 金融恐慌と機関銀行破綻―東京渡辺銀行の系列企業を中心に―，『滋賀大学経済学部研究年報』第 3 巻，pp. 39-80
上久保敏　2003 『日本の経済学を築いた五十人―ノン・マルクス経済学者の足跡』，日本評論社
鴨下信一　2004 演出家　鴨下信一の「経済小説の作法」，「週刊ダイヤモンド」第 92 巻 28～33 号
神田幸平　1867 『経済小学　上，下』，紀伊国屋源兵衛
堺憲一　2001 『日本経済のドラマ―経済小説で読み解く』，東洋経済新報社
堺憲一　2010 『この経済小説がおもしろい !』，ダイヤモンド社
堺屋太一　2002 『平成三十年』，朝日新聞社
佐高信　1983 『経済小説でしか書けなかった話』，東洋経済新報社
佐高信　1987 『失言恐慌　ドキュメント・東京渡辺銀行の崩壊』，駸々堂出版
佐高信　2004 『経済小説の読み方』，光文社
『社会文学事典』刊行会　2006 『社会文学事典』，冬至書房
杉江雅彦　2010 経済事象と経済小説―事実と虚構の葛藤―，『同志社商学』商学部創立 60 周年記念号，pp. 46-69
杉原四郎　1990 『日本の経済思想家たち』，日本評論社
鈴木恒夫，小早川洋一　2006 明治期におけるネットワーク型企業家グループの研究―『日本全国諸会社役員録』（明治 31･40 年）の分析―，『学習院大学　経済論集』第 43 巻第 2 号，pp. 183-221
高橋亀吉，森垣淑　1968 『昭和金融恐慌史』，清明会出版部
玉置紀夫　1994 『日本金融史』，有斐閣
竹村民郎　1998 余暇環境としての郊外の成立―阪神電鉄 PR 誌『郊外生活』に関連して，『日本人の労働と遊び―歴史と現状』（Linhart, Sepp，井上章一編）第 8 章，国際日本文化研究センター，pp. 113-131
寺西重郎　2010 『構造問題と規制緩和』，「バブル/デフレ期の日本経済と経済政策」第 7 巻，慶応大学出版会
中村宗悦　2004 金本位制移行から昭和恐慌まで：歴史的概観，岩田規久男編『昭和恐慌の研究』序章，東洋経済新報社，pp. 1-15
日本ペンクラブ　2014 『経済小説名作選』，筑摩書房
牧山耕平　1880 『経済論読本』，牧山耕平
柳田泉　1936 『随筆明治文学』，春秋社
山﨑義光　2006 久野豊彦における一九三〇年前後―「ナタアシア夫人の銀煙管」と「人生特急」―，『横光利一研究』第 4 号，pp. 1-12
山澤逸平，山本有造　1990 貿易と国際収支，山川一司編『長期経済統計 14』第 4 刷，東洋経済新報社
山本正秀　1959 小新聞談話体文章の実態，『茨城大学文理学部紀要』人文学科第 10 号，pp. 27-40

【参考文献・非学術】

Ehrenburg, Ilya G.（Эренбу́рг, Илья́ Г.）　1931 “Фабрика снов,” Петрополис, Berlin
Kästner, Erich　1931 “Fabian : Die Geschichte eines Moralisten,” Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart und Berlin
飯田旗軒　1916 『金』，博文館
伊藤永之介　1930 『恐慌』，文芸戦線出版部
今西夙川（林三郎）　1920 『愛国美談：経済小説』，東京堂書店
江見水蔭，谷活東　1906 『稲妻銀行』，青木嵩山堂
遠藤樓外樓　1922 『銀行罪悪史：吾輩の最新銀行論』，日本評論社
尾崎紅葉　1898 『金色夜叉』，春陽堂
梶山季之　1962 『黒の試走車』，光文社
春日舎長閑（後藤薫），草風亭芳之（高橋芳之丞）　1888 『黄金之花：経済説話』，南風閣
久我青村　1937 「金：ラルジャン」，『経済マガジン』第 1 巻第 1～4 号，ダイヤモンド社
久野豊彦　1932 『人生特急』，千倉書房
黒岩涙香　1889a 『銀行奇談大盗賊』，金櫻堂
黒岩涙香　1889b 『銀行奇聞他人の銭』，三合館
黒岩涙香　1889c 『銀行奇談魔術の賊』，小説館
幸田真音　2004 『代行返上』，小学館
小林多喜二　1929a 「蟹工船」，『戦旗』1929 年 5～6 月号，戦旗社
小林多喜二　1929b 「不在地主」，『中央公論』1929 年 11 月号，中央公論社，『戦旗』1929 年

12 月号，戦旗社
堺屋太一　2002 『平成三十年』，朝日新聞社
不知火　1893 『十萬株：探偵小説』，筒井民治郎
城山三郎　1959 『総会屋錦城』，文藝春秋新社
城山三郎　1979 『鼠―鈴木商店焼打ち事件』，文春文庫
杉田望　2003 『アカハラ：小説 DNA スパイ事件』，毎日新聞社
高杉良　1997 『金融腐蝕列島』，角川書店
高村薫　1997 『レディ・ジョーカー』，毎日新聞社
探偵研究会　1915 『白き腕』，日吉堂
長木桂一郎　1929 『裏面を語る　財界打明け話面白い経済常識』，日本倶楽部社
葉山嘉樹　1926 「セメント樽の中の手紙」，『文芸戦線』第 3 巻第 1 号，文芸戦線社，pp. 11-13
原田道男　1926 「フラン暴落の教訓」，『作興』第 5 巻第 9 号，講道館文化会，pp. 20-23
細井和喜蔵　1925 『女工哀史』，改造社
前田香雪（健次郎，昔廼人成）　1888 『金貸気質：経済小説』，駸々堂
松本清張　1951 「西郷札」，『週刊朝日』昭和 26 年春季増刊号，朝日新聞社
三宅青軒　1893 「火中の美人」，『探偵小説第 18 集』，春陽堂
山田中　1928 「嵐吹く日」，『公民講座』第 43～48 号，実業同志会市民講座部
横光利一　1931 『機械』，白水社
横光利一　1938 『家族会議』，創元社
吉田直次郎　1901 『銀行頭取謀殺事件』，至誠堂
米光関月　1909　差米籠，『実業少年』第 3 巻第 5 号，博文館，pp. 64-68